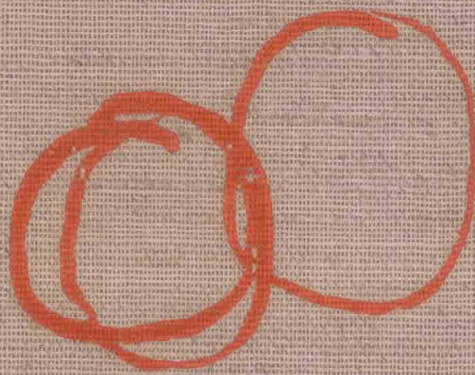




高見順全集

第九卷

勁草書房刊

高見順全集 第九卷

定價二五〇〇圓

昭和四十五年四月十五日印刷
昭和四十五年四月二十五日發行

著 者 高見 順

發行者 井村壽二

印刷者 山田 博

發行所 勁草書房

東京都千代田區神田駿河臺一ノ三
電話東京二九四(六二二二)
振替東京一七五二五三
◎高見順 一九七〇
(〇三九三—八三四—一八三六)

高見順全集
第九卷

編纂委員
川端康成
伊藤整
澁川驍
平野謙
中村眞一郎
小田切進

神	机上生活者	流	工	手	前	外資會社	波打際	地下室	目次
經		木	作	袋	後				

大部屋の友	177
湯たんぽ雀	185
人 間	212
盛り場	233
日向見の宿	247
雲の影	256
蜥 蜴	273
ある家の二階と階下	290
暖い空気	307
日曜と月曜	315
都會の雌雄	326

光 彩
通 俗
淺草の風俗
往 生 際
銀座暮色
心 理 的
滑 稽 的
大森暮色
嫌 人 的
昇 天
花さまざま

野 茨

私と商人との交渉

505 497

解説
中村眞一郎
解題

537 529

短篇小說二

地下室

その筋のきついお達しに依り、今はこんな大變な地下室はなくなつた。つまり人間のかほりにものをを入れておく物置に成つた由、傳へ聞いたが、その時だつてそのアパートの地下室はてんで物置みたいなもので息のかよつた人間が住めようとはどうしたつて想像でき難い穴倉であつた。これは言ひ換へれば、そんな地下室に住んでゐた人間は、人間といふよりものに近い種類であつたとも言へる。たとへば地下室の一番奥に、まるで冬眠の蟄蛙みたいな顔と恰好をして住んでゐた拳闘屋などは、焼酎をくらつて上機嫌になると、なにがなんでも——と叫んで、岩のやうな拳固で自分の顔を眞正面からデンとひつぱたく。すると、水分を含んだ肉塊が押し潰される時の奇怪で無慙な音がし、拳固の下から、べしやんと平らになつた鼻が現れる。だが、人間の鼻といふものは人間の顔

の中央に大體三角嚙の形で隆起してゐて、さう勝手に可笑しな橢圓形や菱形に化して隆起形態を脱するといふことのないのが定則であらうから、餅を潰したみたいにべしやんこになる鼻のごときは人間の鼻と言ひ得られるだらうか。即ち、彼が人間の鼻でない所のちよつとちがつた鼻的物質を持つてゐるとしたら、その一事を以つてしても、果して彼は人間と言ひ得られるだらうかといふことになる。人間以外のところへ、どうやらは、出てゐると言はれても仕方ない。地下室の拳闘屋は、だから、かうしたおぞましい振舞をちやんとした人間どもに見せるのを當然つしまねばならぬことわりであつたのだが、彼はこれを以つて酒席に興を添へることの出来る唯一の隠し藝としてゐたのだつた。以前はウェルター級の相當名のひびいた選手であつたが、なんとかいふ比島の拳闘選手に手ひどいK・Oを食はされてから頭が變になり、食へなくなつて、地下室に入つてきたといふ評判だつた。鼻をべしやんこにする藝當も氣が變な證據だとされてゐたが、これは彼の善き意志にも拘らず、反對の効果しか齎さなかつた。興を添へるところか、なんともいへない凄慘の氣が颯と吹いてきて、座のものをたちから折角の酔ひを奪ひがちであつたから、なれた者たちは彼が何かの拍子に突如として、なにがなんでもと叫び出すや否や、あわてて止めた。

「——よし分つた。もういい」

「分つた？——なにがなんでも」

拳闘屋は抑へられた腕を振りほどかうと腕きながら、隠し藝のいはば前奏曲である「なにがなんでも」を執拗に繰り返す。まはりの者たちの氣持を勿論察することのできない彼は、彼以外のものがいづれも安來節とか浪花節とかを披露して座に興趣を興へる可く非常に努めてゐるにも拘らず、さうした音曲の類ひはからきし駄目な自分なので、どうしても、なにがなんでもえの曲藝を見せて不公平のないやうにせねば濟まぬとしてゐるのだつた。

「な、なにがなんでも」

「——いいッてことよ。まあ 飲みねえ」

「なに言つてやんでえ。なにがなんでも」

無理にとめて暴れられても困るから、拳闘屋がどうしても「なにがなんでも」を言ひやめない時は「——ちや勝手にしな」と手を離すより仕方なかつた。

グシャッ！ 人々は眼をそむけてゐても耳を塞ぐことは出来なかつた。いやな氣持で唾を呑む。つづいて、へ、へ、といふ（少しく誇張して言へば）この世のものとも思はれぬ笑ひが拳闘屋の咽喉から洩れ出て、人々の耳に忍び込む。どうぢやいといつた得意の笑ひなのだが、その笑ひを浮べた彼の顔も亦全く化物に他ならぬ。鼻柱がクナクナの拳闘家は珍しくないが、こんなにべしやんとなるのは稀有に屬する。その稀

な鼻を一刻も早く撮み上げ、凄い顔でなくなつて貰ひ度いとおもひ、人々は拍手がはりにへへへッとか笑はねばならなかつた。そのへへへッが、この時はいつもどうした加減か、拳闘屋のへへへッにそっくり似て了ふのも氣持悪いことであつた。「やあ御苦勞、御苦勞。キューッといつぱいやんねえ」さう言つて、はたのものは自分がさきに強烈な液體を口の中に流し込むのであつた。

この藝當は酒席の隠し藝である許りでなく、金のほしい時の拳闘屋にいくばくかの金を齎すものでもあつた。ハイダン（強請）をかけ、相手が愚圖つくと、なにがなんでも、グシヤッとやる。懷に手を入れドスを握つてみせるのなんかより相手の心膽を寒からしめるのにききめがあり、警察にもつて行かれた場合咎めも輕くてすむといふものだつた。だが彼はこの上機嫌の時の隠し藝を自發的に「賣りもの」にすることを好まぬ傾向で、多くは同じ地下室に巢食ふやくざの新公といふ男に依頼されやむなくやる様に見えた。つまり新公に同道を強ひられ、威嚇のタンカは新公が受持ち、威嚇のワザを拳闘屋が演ずる段取りである。瓢箪のやうな顔をしたこの新公に言はせると、拳闘屋は「まるで慾の無え瘋癲」であつた。地下室の住人はいづれも多少とも瘋癲であつたが、その瘋癲どもから特に瘋癲と言はれてゐたのは、この拳闘屋とそれから湧島好次であつた。——

湧島好次は地下室隨一のインテリで、荒み^す妻れてゐるとはいへインテリらしい端麗な顔立ちをした青年であつた。特に廣い額と秀でた鼻が彼の顔を立派にしてゐたが、眼がいけなかつた。窪んだ眼窩の奥でギラギラと燃えてゐる、ただならぬ眼の光りを、隣室の「ネクタイ屋」の女房などは生靈が憑いてゐると言つて、おびえてゐた。

眞夜中に異様な叫びをあげて、部屋から飛び出すことがよくあつた。ウンウンとうなされてゐるのも、しよつちうだつた。唸り聲は「ネクタイ屋」の部屋に遠慮なくそして氣味悪く響いてき、かういふ時といふと、女房がまた運悪く眼をさますのだつた。この不意に眼がさめるといふことが、彼女には、湧島を苦しめてゐる怨靈となにか自分との間に關係でもあるかのやうに思はれ、おそろしさに身を震はせ、傍の亭主を揺り動かさずにゐられなかつた。「――よオ、ちよつと起きとくれよ。よオ、お前さんたら！」

「ネクタイ屋」は晝の疲れて仲々眼をさまさうとしない。身重の女房が今では稼ぎに出なくなつたので彼は責任が重くなり、その責任の重さが彼を疲らせてゐた。カフェーの醉客にあぶり出しを賣つてゐた女房の稼ぎの分を、つまり彼は背負ひ込まねばならなかつたのだが、疲勞の割にはかならずしも澤山稼いでくる譯ではなかつた。稼がねばならぬといふあせりだけで充分草臥れて、實際の稼ぎ高は女房と共稼ぎの時分

とそんなに違ひはしなかつた。――一方、女房が隣室の魔され聲におびやかされる可く夜中に不意に眼が覺めたりするのは、あぶり出しを賣りに出なくなつて頃に身體が樂になつたせゐで、湧島を苦しめる怨靈が彼女となにかつながりがあるところから彼女の眠りを破る譯では勿論なかつた。だが、彼女は更に、その怨靈がちよつとした出來心から腹のなかの子に思はぬ^いわるさをしはせぬかと憂へるのだつた。

そこで怨靈の訪れを防ぐため、是非とも亭主に起きてゐて貰ひたかつた。

「ねえ。お前さんたら」

「ム――」

「お願いだから……」

「ムニヤ、ムニヤ」

「大變だよ。――起きとくれよ」

「――うるせえな。なんだ」

「隣りの人がまた魔されてるんだよ」

亭主は芋蟲のやうに眉を寄せて、舌打ちをした。東京育ちの彼は信州の山奥の産である女房と違つて人間に取り憑く生靈の存在といふものをさう眞剣に信じてゐなかつた。それに何よりもねむかつた。うるさい女房の手をひつこめさせる爲、彼は膨れた女房の腹部を足で蹴つた。偶然蹴つたのではなく腹部を初めからねらつて蹴つたのだ。ききめは觀面で、うめ

き聲と共に女房の手は彼の胸倉を離れて自分の腹を抑へた。苦痛のちに口惜しさがこみ上げてきた女房はその遣り場に困つたが、自分の隣りに口をあけてぐっすりと寝入つてゐる娘の美枝を見ると、その顔を平手でびしやりとぶつた。美枝は吃驚して身體を起し、汚い夜着の胸からまだ成熟しない乳房をのぞかせ、「——なアに」と言つた。

「なアにぢやないよ！」

なれた美枝は「いやだわ」と言つて、靜かに横になつた。十五の美枝は母親の連れ子で、同じやうにあぶり出しを賣りに夜の街に出てゐたが、母親とは稼ぎの場所を別にしてゐた。——

湧島はかうして隣室の孕み女を悩ましてゐたが、湧島自身は悩ましてゐる事實を知らなかつた。黄色い狐のやうな顔をしたこの女は、生靈の憑いてゐる恐ろしい若ものなど勿論口をきかうとはしなかつたからで、又湧島の方も孕み女に話しかける興味を持たなかつた。ところが聴てお互に口をきく機會が來た。ある夜、湧島が「ネクタイ屋」の部屋へ自分から訪れてきたのだ。

「おぢさん頼みがあるんだが」

戸口に立つてさう言ふ湧島の唇が女房には血に塗れた傷口のやうになまなましい赤さに見えた。

「まあ、はいんな」

氣安く言ふ亭主に「——およしよ」と危く口に出して叫ぶところだつた。湧島はさうした女房の怯えにかまはず、蓬髪を掻き撫でながら部屋に入つてき「やあ——」と言つて女房にギロリと光る眼を投げた。（あの眼！）女房は息を呑み、袂で腹を押し隠した。

「頼みッてのは、——ネクタイを僕に卸してくれないかな」

「——どうするのだ」

「勿論賣りに出るのさ。金が無くて弱つてゐるんだ」つづいて何か言つたが、ガーッといふ市内電車の音に消された。轟音はすぐ頭上に聞かれ、言葉だけでなく人間をも壓殺しさうであつた。

地下室の「ネクタイ屋」が取り扱つてゐるネクタイは特殊な品物であつた。屑屋のぼろ籠のなかから拾ひ出してきた廢物のネクタイによつて製造されるネクタイである。ぼろぼろになつた奴に裏から布を當てがひ、泥繪具と糊をつけ、暗い所で見たらどうやらネクタイに見えるといつた代物に仕上げるのだが、市内の某所にその卸屋がある。地下室の「ネクタイ屋」はそこから買つてきて、特殊なネクタイに應はしい特殊な賣り方をしてゐた。湧島はその彼から中間卸しをして貰つて、彼とおなじ特殊な賣り方をしたと頼み込んだのだ。ではその特殊な販賣法とはどういふのかといふと、——それはその翌日、早速夜の街に商賣に出掛けた湧島の跡をつけて

紹介することにしよう。即ち、その夜、湧島と「ネクタイ屋」との間に商談が成立したのだが、それは女房をいたく悲しませ、恐れさせた。湧島にちよこちよこ部屋を訪ねられるといふことは、湧島に取り憑いてゐる生霊に訪ねられるといふことに他ならず、全く穩かならぬ次第である。それ故、商談が済むと、女房は思ひ切つた顔で言つた。「——つかぬことを言ふやうだが……」

湧島は例の眼を女房の顔にまつすぐ注ぎ、女房は首を縮め、しばし動悸の激しい胸に手をやつて心を静めたのち「——あんたは時々魔されてゐなさるが」

湧島の眼が凄さを増した。

「一遍御祈禱をしてもらつたら……」

「御祈禱？」

「いや、なに」——亭主が枯枝のやうな手を振つた。「こいつは莫迦なことばかり言ひ腐つて……」

電車の音が襲つてきた。暗い電氣のまはりに埃が蟲のやうに渦巻いてゐる。轟音が去ると、泥酔した新公が何やら大聲で喚いてゐるのが聞こえてきた。「湧島さんは何か人から怨まれるやうなことをしてやしないかね」女房は亭主にかまはず言ひ立てた。

湧島の表情が一瞬にして變つた。違つた顔が出てきた感じだ。

「氣にしねえでくんねえ、この阿魔、下らねえことを言ふのはよしねえ」さう言ひながら、湧島の手が俄かに震へ出したのを見逃さなかつた。亭主には兇狀持ちの手と察せられた。だが、この地下室には多少ともうしろぐらいところのない人間は一人だつてゐなかつた。

「何か憑いてんだよ。湧島さん」女房は眞剣だつた。「——御祈禱で祓つて貰ふといいよ。さうやつてゐられるうちはいいけど寝込んだら困るからね」

湧島はネクタイを纏むと、ビツクリ箱の人形のやうに立ち上つた。そしてすぐ背を見せ、戸口に行つた。

戸口が向うから開いて、そこに美枝が立つてゐた。もともと顔色のよくない少女が今夜は特に目立つて紙のやうに蒼褪めてゐる。眼のまはりに薄紫の隈が出来、長い睫毛の重さに堪へかねて臉を細めてゐる風だつた。湧島はその美枝の傍をすりぬけるやうにして出て行つたが、すれちがつた瞬間、うつすらとではあるが美枝のまはりに漂うてゐる異様な臭氣が彼の鋭い鼻を衝いた。

「——なんだね、この子は。早いぢやないか、まだ」突慥貪な母親の聲に「だつて今夜はとっても景氣が悪いんだもの……」「だから早じまひするって手はないぢやないか。ずるけると承知しないよ」さうした聲を背に聞いて湧島は自分の部屋に轉げ込んだ。

「ぼんやりつッ立つてゐないで入つたらいいだろ」澁る美枝に「——さあ、お金をお出し」

美枝はいつもと違ひ快活さを失つた物腰で母親に近附いた。母親は腰を立て、延ばした手で美枝の頬をビシヤリと打つた。いつもはこんなことはないのに、今夜はどうした譯か、美枝は打たれるとワツと泣いて茶褐色の臺の上にくらがつた。翻つた著物の裾にどす黒く滲みた血の跡があつた。

「おや、——お前」母親は眉を寄せた。美枝は瘦せた肩を震はせて泣いた。

「静かにしねえか」足の爪を切つてゐた父親がこつちに背を見せたまま怒鳴つた。母親は口をあけて美枝の身體を見おろしてゐた。

西銀座裏の暗い河縁を若い男女が肩を並べて歩いてゐる。運河の反対側には省線のガードが河にそつて黒々と走り、シグナルのひかりが黒い水に色の影を落してゐる。逢曳には絶好の場所であり、その若い男女が戀をささやいてゐるらしいことは風情ですぐ知れた。湧島は昨夜仕入れたネクタイの包みを小脇に抱へて、二人の跡をつけてゐた。いざと成ると仲間勇氣が出ないので彼は自分に腹を立ててゐた。もとは俺は我武者羅だつたぞ。だが、こんなケチなことに我武者羅になれないのは當り前の話だ。いや、ケチなことと言つてはなら

ぬ。かうやつて俺の神経をだんだん抹殺して行くんだ。ケチなことぢやないぞ。——拳を握り、スタスタと二人の背後に追つた。若いサラリーマン型の男がギョツとした顔を振りかへらせた。湧島は無言のまま、ネクタイの箱を相手の胸許目掛け匕首を突きつけるやうにさつと出した。

「な、なんだ。君」

「——ネクタイを買つてくれませんか」

「ネクタイ？」途徹もない大聲を出した。湧島の耳にはさう聞かれたのだ。

スワガー・コートを着た連れの女が襟首を搔くやうな手附でウエーブのかかつた斷髪を直し乍ら、湧島に臆せぬ眼差を送つてゐる。湧島はさうした女の態度に、こいつはシケかなと初めてのかなしさに早くもひるみながら「——上等のネクタイなんですがね。一圓五十錢」

「いらぬいな」男は背を見せた。

「さう言はねえで、買つて下さいよ」歩き出した二人の間に割り込むと「いらぬいと言つてるのよ」若い女が言つた。

なにを、——湧島はすんでのことになるどころだつた。自分が女にちつとも恐怖を與へてないことが口惜しかつた。「あなたに頼んでんぢやないよ」女を睨みつけた。ガードの上に電車が走り、走る光が彼の眼をぎらつかせた。「一圓。どう。一圓にまけとかあ」